



3D測量図から
別区と周堤の接続部で周堤が1段上がる
可能性を復元

墳丘前方部頂
間隔…周堤と同じく4.3m。
種類…1963年の大雨時の露出、
石刀(3)扁平石人(1)と靱(1)
の比率で配置
数量…扁平石人(5)靱(5)
石刀(15)
石刀は内側に配列
範囲…後円部頂まで配置
その外部に周堤と同じ密度で
端から1.8m中央寄り
(1段目出土状況)に
円筒埴輪(122)
後円部
円筒埴輪(55)
扁平石人(2)軍談

石刀
靱
扁平石人

1967年国土地理院の
航空写真から周堤のくびれの可能性を再現

2段目のみ葺石を置く

2体の扁平石人を配置

周堤の円筒埴輪群
周堤の中央

石靱と石盾が交互に並ぶ
間隔4.2m
周堤504.7m
各120/2(60)個

墳丘の円筒埴輪群
端から1.8m中央に寄る

墳丘、周堤の南側は後世の改変が著しく、
北側から反転

71年調査3号トレンチ
1963年の大雨調査から
葺石は2段目のみ

1972年調査時の
3号トレンチ土層から墳端、
周堤端を推測

周堤西側は前方部西側に対し
並行ではなく、南側が若干西に
広がる



図面は1/100
周堤の円筒埴輪列
(直径0.6m、中心間の距離1m、埴輪間0.4)
図面上の埴輪列の長さ5154mm→515.4m
1m中に1個の埴輪が存在するので、約515個の円筒埴輪が並ぶ計算になる

墳丘の円筒埴輪列
(直径0.6m、中心間の距離1m、埴輪間0.4)
図面上の埴輪列の長さ3578mm→357.8m
1m中に1個の埴輪が存在するので、約358個の円筒埴輪が並ぶ計算になる